

# 保育日誌を活用した看護ケアの提供

キーワード：病棟保育士・保育日誌・連携・看護計画・看護ケア

## 1 病棟 5 階東

○ 岩鼻かなみ 三村かよ子 岩田友美 中岡信子 河井紗衣子 板垣智恵子

### I. はじめに

当科では、平成 18 年 10 月から入院患児の精神的健康や成長発達を促し、社会性を養う目的で病棟保育士が導入となり、平成 20 年 1 月から、病棟保育士による入院患児への保育状況を看護師と病棟保育士とで共有する目的で保育日誌を導入した。しかし、看護師の保育日誌への認識が低いことや、業務の繁雑さによりなかなか目を通すことが出来ないのが現状である。

保育日誌には患児の成長・発達や家人の不安等も書かれているが、看護師が保育日誌に目を通すことが少ないため必要な情報が共有できておらず、看護ケアに結びついていなかった。今回、看護師が保育日誌の目的を認識し、保育日誌を活用することで病棟保育士と連携をとり、得た情報を看護計画へ取り入れる方法を検討したので報告する。

### II. 方法

#### 1. 対象

1 病棟 5 階東 看護師 23 名

#### 2. 方法

調査期間：平成 20 年 6 月～10 月

- 1) 保育日誌に関する質問紙を独自に作成し、看護師を対象に 6 月にアンケートを実施した。調査内容は保育日誌の認識の有無、使用頻度、カンファレンスへの活用状況等で、各設問に応じて二者択一、自由記載欄等で尋ねた。
- 2) 保育日誌の置き場所を検討し、プレイルーム内からナースセンター内に移動した。
- 3) 看護師に保育日誌の活用を呼びかけ、保育日誌の内容から看護師間でカンファレンスを行った。(保育日誌は写真 1、2 参照)
- 4) 再度 10 月に同様のアンケートを実施した。
- 5) 回収したデータを単純集計した。

#### 3. 倫理的配慮

アンケートは無記名で行い、個人が特定できないように配慮し、データは本研究以外には使用しないことを明記した。

写真 1  
保育日誌



写真 2  
保育日誌内容

- ① 月 日  
(時間、午前、午後、計)
- ② プレイルームの利用者
- ③ 内容・気付き
- ④ Aチーム、Bチーム
- ⑤ 看護師からのコメント  
(行事等、看護師サイン、  
保育士サイン)

①	②	③	④	⑤
月 日	プレイルームの利用者	内容・気付き	Aチーム Bチーム	看護師からのコメント

### Ⅲ. 結果：

以後 6 月に実施したアンケートを「アンケート①」、10 月に実施したアンケートを「アンケート②」と表記する。有効回答はアンケート①では 23 名、アンケート②では 21 名であった。

#### 1. 保育日誌の認識・閲覧頻度

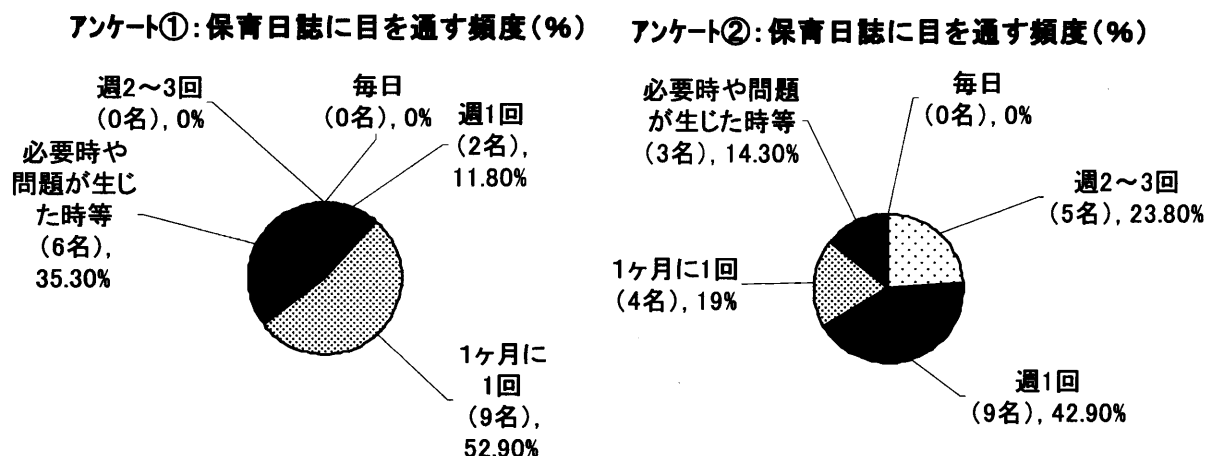
アンケート①では保育日誌の存在を認識している人は 23 名 (100%) であったが、所在場所を認識しているのは 19 名 (82.6%) であり、目を通したことのある人は 17 名 (73.9%) であった。

保育日誌に目を通したことがない人 6 名 (26.1%) の理由は、「忙しい」4 名 (66.7%)、「身近な場所がないから」4 名 (66.7%)、「場所を知らない」2 名 (33.3%) であった (複数回答)。また、今後活用してみたい人は 6 名 (100%) であった。保育日誌についての意見を自由記載で尋ねたところ、「プレイルームまで見に行くのが難しい。身近に置いてあればもう少し活用できると思う」「日頃見ることができない患児の姿がわかるかもしれないので、もっと保育士と関わり、保育日誌に目を通し、情報交換していきたい」「もっと日々のカンファレンスに取り入れたい」「保育士が保育日誌を書いているのに情報交換があまりできていないので、話し合いの場を設けてみてはどうか」という意見があった。

アンケート①の後、保育日誌の置き場所の検討や看護師へ活用の呼びかけを行った結果、アンケート②では、保育日誌の存在を認識している人、所在場所を認識している人、目を通したことのある人は、いずれも 21 名 (100%) と増加していた。

アンケート①では、目を通したことのある人のうち、目を通す頻度は「週 1 回」2 名 (11.8%)、「1 ヶ月に 1 回」9 名 (52.9%)、「必要時や問題が生じた時等」6 名 (35.3%) であった。アンケート②では、目を通したことのある人のうち、「週 2~3 回」5 名 (23.8%)、「週 1 回」9 名 (42.9%)、「1 ヶ月に 1 回」4 名 (19.0%)、「必要時や問題が生じた時等」3 名 (14.3%) と頻度が増加していた (表 1 参照)。

表 1



## 2. カンファレンス・看護計画への反映

アンケート①では、保育日誌の内容についてカンファレンスを行ったことがある人は 4 名(23.5%)、ない人は 13 名(76.5%)であったが、アンケート②ではカンファレンスを行ったことがある人は 11 名(52.4%)、ない人は 10 名(47.6%)とカンファレンスを実施した人は増加していた。

カンファレンスの内容は、アンケート①では「付き添い者のストレスや患児の ADL を把握する時」「児のストレスコーピングについて」「母の精神的なサポートについて」がそれぞれ 1 名であった。アンケート②では、「要求の多い児への関わり方について」4 名、「児の発達・遊びの援助について」3 名、「家人の精神的なサポートについて」2 名、「プレイルームでの患児の関わりについて」2 名、「児の ADL 自立について」1 名、「患児の退院後のフォロー」1 名「付き添いについて」1 名であった。

また、カンファレンスの内容を看護計画に反映させることができた人は、アンケート①では 3 名(17.6%)、できていない人は 11 名(64.7%)であった。計画の内容には「リハビリの取り組みや介入」「退院後のサポートについて」「保育士・看護師双方の意見の統一、本人への説明の統一」などがあつた。アンケート②では、カンファレンスの内容を看護計画に反映させることができた人は 7 名(33.3%)、できていない人は 10 名(47.6%)であった。計画の内容には「保育士と児の預かりを交代する」3 名、「成長・発達に応じた遊びの援助」2 名、「家人への援助・関わり」2 名、「児がプレイルームで過ごす時間を設ける」1 名、「プレイルーム使用中に必要時吸引を行う」1 名であった。

## 3. 病棟保育士との連携について

アンケート①では、病棟保育士に保育日誌の内容を確認したことがある人は 10 名(58.8%)であったが、アンケート②では 11 名(52.4%)であった。

## IV. 考察

### 1. 保育日誌の認識・閲覧頻度について

病棟保育士は、連続的に子どもの様子がみられるので、子どもの小さな変化に気がつくことができ、一貫性を持って保育に携わる有利性がある<sup>1)</sup>と市原らが述べているように、患児が安定した入院生活を送るための重要な役割を担っている。そのため、患児や家人のプレイルームでの様子が記載されている保育日誌は、看護師がケアを行う面で重要な情報源となる。当科では保育日誌を導入したが、看護師の認識が低く十分に活用されていない現状があつた。活用されていない理由として、保育日誌の置き場所と業務の繁雑さがアンケート①の結果から明らかとなつたため、置き場所をナースセンター内に移動し、誰もが目を通すことができるようにした。また、保育日誌の移動場所を看護師に伝え、保育日誌に目を通し、カンファレンスを実施するよう活用を呼びかけた。その結果、看護師全員が保育日誌を認識し、目を通すようになった。このことから、保育日誌の認識の低さは、その定位置がプレイルーム内であつたことが要因の一つであつたと思われる。改善後は、業務の繁雑さの中でも、保育日誌が手の届きやすい場所にあつたため看護師が目を通す頻度の増加に繋がつた。今後も保育日誌の置き場所をナースセンター内にすることで、保育日誌が活用されると考えられる。

## 2. カンファレンス・看護計画への反映について

保育日誌を活用しカンファレンスを実施した人は、アンケート①では4名(23.5%)であったが、アンケート②では11名(52.4%)と著明に増加した。その理由として考察1で述べたように保育日誌の置き場所を検討し、活用を呼びかけたことが関係していると思われる。カンファレンスの内容はアンケート①ではストレスの緩和や精神的なサポート等で、問題が生じた時のみカンファレンスを実施していた傾向があった。しかし、アンケート②では、アンケート①と同様なカンファレンス内容に加えて、遊びの援助やADLの拡大といった児の成長・発達を促す内容を取り上げる機会が増加した。このようにカンファレンスの回数が増加したことにより、個別性に応じた看護計画を立案できるようになり、看護ケアの充実につながったと考えられる。

## 3. 病棟保育士との連携について

アンケート①と②の結果から、病棟保育士に保育日誌の内容を確認した人の割合は軽度低下していることが明らかとなった。中には、病棟保育士と保育日誌の内容をもとに話し合い、その結果を看護計画へ反映できた看護師もいたが、保育日誌に目を通すだけで内容を病棟保育士に確認できていない看護師もいた。当科では8時40分から看護師間でカンファレンスを実施しているが、病棟保育士は出勤時間が10時からのため参加できていない。他の病院では、保育日誌を用いて看護師と病棟保育士間で申し送りを実施している病院もあるが、当科ではそのような時間を設けておらず、連携をはかる際には業務の合間に直接、病棟保育士との話し合いを行っている。しかし、病棟保育士は業務時間の大部分を患児と接する時間にあてているため、看護師が業務の合間に保育日誌の内容を確認することは困難である。病棟保育士から情報を得ても、それを看護の活動に組み込まなければ、連携したことにはならない<sup>2)</sup>と平林が述べているように、保育日誌に目を通すだけでなく、内容を病棟保育士に確認し看護計画へ反映しなければ保育日誌を活用したことにはならず、病棟保育士との連携につながらない。しかし現状は、病棟保育士と連携をとり看護計画を立案できている看護師は一部である。有用な情報が記載されている保育日誌を活用するためにも、保育のスペシャリストである病棟保育士の意見も取り入れ、連携を深めていく必要がある。

## V. 結論

今回の研究で保育日誌の置き場所の検討や保育日誌を活用したカンファレンスを呼びかけたことにより、保育日誌を認識し目を通す看護師が増加した。しかし、病棟保育士とは十分な連携ははかれていなかった。今後は看護師全員が保育日誌を活用し、病棟保育士と情報交換を行う場を設け共にカンファレンスを行うこと、そしてその結果を看護計画へ反映させ、看護ケアを提供することが課題である。

## 引用文献

- 1) 市原香波, 佐々木友紀子: 病棟保育士の活動と役割, 小児看護, 24(7): p918~p923, 2001.
- 2) 平林優子: 保育士との連携, 小児看護, 27(5): p640~p645, 2004.